

# 日本とアメリカの大学運動部活動統括組織に関する研究

## ～UNIVAS 設立を受けて～

スポーツマーケティングゼミナール 1216181 八木千夏

### 1. 研究動機・研究目的

日本における運動部活動は、国が学習指導要領上で定めた教育課程には含まれない課外活動である。それゆえ、運動部活動を支える制度的な基盤はきわめて脆く、教育課程外の活動であるため責任の所在が不明瞭である。この現状を改善し、スポーツの産業化を実現するため、2018年10月にスポーツ庁は大学スポーツ協会（以下、UNIVAS）の設立を発表した。しかし、日本の運動部活動は脆弱な基盤の制度であることと、アメリカではNCAAと連携し大学競技スポーツのマネジメントを行うアスレティックデパートメント（以下、AD）が各大学に存在しているのに対し、日本ではADを設置している大学やADの研究自体が少なく運営の実態や課題、現状などが不明確であるため、UNIVASがうまく機能しない可能性が懸念される。

そこで本研究では、日本でADを設置している大学への調査によって浮き出る課題を整理し、アメリカでADの仕組みとNCAAとの連携の仕方、NCAAや他の組織との関わり方を参与観察するという二段階の調査をもって、日本の運動部活動の基盤となる制度にどのようなアプローチをしていくかを目的とした。

### 2. 研究方法

今回の研究ではアメリカのNCAA組織ではなく、大学に属するAD組織・スタッフに着目し、日本国内のADを設置している大学の学識者へのインタビューと、ADが一般的に普及しているアメリカの高校と大学のアスレティック・ディレクター（以下、ADir.）へのインタビューを行った。

インタビューについて

ADを設置・推進している日本体育大学におけるAD研究の第一人者である学識者と、ハワイ大学マノア校、University Laboratory SchoolのADirにそれぞれメールでアポイントを取り、インタビュー調査を行った。なお、日本体育大学の学識者へのインタビューをもとに、日本におけるADの役割や課題を整理し、アメリカでのインタビューの質問用紙を作成した。ハワイ大学マノア校のADirには事前に調査依頼書とともに、質問項目をeメールにて送付し、インタビューを実施した。

調査期日

日本体育大学での調査：2019年 3月18日 日曜日 14時～15時

アメリカでの調査：2019年10月25日 金曜日 14時～15時半、16時～17時

場所

日本体育大学 世田谷キャンパス

University of Hawaii at Manoa

University Laboratory School

### 3. 主な結果と考察

日本では学生の運動部活動での活動状況は大学あるいは大学内の組織によって管理されているが、学習状況や金銭面（授業料、奨学金）など教務課、学生課等がそれぞれを個々の部署で管理するため、学生自身の情報や現状が見えにくいことが指摘された。また、大学入学後、学生アスリートおよび一般学生は同じ基準や見方で管理されていることが課題として挙げられた。アメリカでのインタビューからは、AD 運営・女性の活躍・役割分担と専門家・チームビルディング・財務管理と人事権というキーワードが抽出された。アメリカの大学ではADが学生アスリートの情報を管理し、他の専門性を持った部署が活動しやすくなるように運用している。また、チームビルディングを尊重し、女性や個人が意見を主張してチーム全体で物事を進められる環境づくりに努めている点が特徴的であった。アメリカでのインタビューからは、日本の大学でのスポーツ振興を目指したUNIVASのような組織を効果的に運用させるためには、各大学において学生アスリートの情報や管理・運営を担当する組織の整備の必要性が示唆された。さらに組織運営の中心を担う人材を確立してから、大学内の情報を一か所に集中させて各部署に役割を指令できるADのような部署、あるいはADではなくとも同様の役割を担当できるような組織を設置することが求められる。その結果として、放映権やスポンサーシップなどの権利のマネジメントといったスポーツビジネスや大学が所在する周辺地域との連携などの新たな改革を推進しやすくなると考えられる。UNIVASの必要性や運用に懐疑的な意見がある一方、スポーツ庁の提示する様々なメリットを大学スポーツ界にもたらす組織の定着には踏むべきステップがあると考えられる。

### 4. 結論

日本の学識者とアメリカのADirへのインタビューからは、必ずしもADという組織を設置しなければならないということはないが、学生アスリートの学生としての情報とアスリートとしての情報を一元管理する組織が必要であること、またそのような組織設立にあたって中心となる人材の育成と配置が必要なことが明らかとなった。

### 5. 卒業論文の執筆を終えて

20000字くらいすぐには書けるだろうと思いながら書き始めた卒業論文だがまったく終わりが見えない戦いだだった。本当にみんなどうやって書いているの？というくらい語彙が出てこない。また、卒業論文の定型がわからないまま書き進めたため、結論まで終わったときに見直すと普段授業で課題として出ているレポートぐらいの完成度だった。そんなレポートレベルの論文を先生に添削していただいてなんとか形になったため、多大なる感謝と申し訳ない気持ちでいっぱいである。

執筆よりも調査のほうが大変だった。軽い気持ちでハワイ大学で調査しようとしたが、中学生並みの英語力なのに今考えるとかなり無謀だったと思う。まずアポイントを取る段階でつまずき、何度も投げ出したくなった。英語でのメールの添削、インタビュー、文字起こしなど、本当に多くの方々に助けていただいた。そしてアメリカ人の返信スピードの遅さが辛かった。送信してから1週間後に返って来る時もあり、時差を疑った。身体に流れてる時間感覚の違いについての研究をしたいと思った。ハワイ大学ではしっかり調査データを取ることができたし、ついでに観光も人生のオフ期間だと思って楽しんだがもう見切り発車で気持ちだけの行動はしないようにしようと心に誓った。